

信州読書会 YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書 トーマス・マン 『魔の山 第七章』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

YouTubeLive <https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 <https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)

トーマス・マン 『魔の山』



第 322 回の YouTube 読書会の課題図書は、トーマス・マンの 『魔の山 第七章』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

メルマガ読者八王子ひげだるまさん

「小説とは書き手においては苦行、読み手にとっては読む拷問であるべきだ—『魔の山』以後のトーマス・マン」

(引用はじめ)

「『自分の作品のうち、ドイツでは《ブデンブローク家の人々》が、フランスでは《ファウストゥス博士》が、アメリカでは《魔の山》が特に愛読されているのはおもしろい』とマンは言ったが、私もなるほどとうなずいた。ドイツ人にとっては彼らの古いよい時代をほのぼのとあたたかく描いているブデンブロークがことのほか、いとおしまれるであろう。フランス人には問題的なドイツ精神の業というようなものを描いた『ファウストゥス博士』が、アメリカ人には彼らの精神の故郷ヨーロッパの文化財産目録のような『魔の山』が興味をそそるのであろう」

(「トーマス・マンとの邂逅」高橋健二 新潮世界文学 33 月報)

(引用おわり)

職業小説家は読み手のいない作品を世に出すことは出来ない。トーマス・マンは死の直前まで小説を書き続け、非常に広範なテーマの作品を世に問い続けた。トーマス・マン(1875 年生まれ)と生年の近い島崎藤村(1872 年生まれ)を比較した場合、藤村は初期の「春」から晩年の「夜明け前」に至るまで一族・一家、自身と親族・友人の歴史をモデルとした物語しか書けなかった。これはトーマス・マンでいえば「ブデンブローク家の人々」や「トニオ・クレイガー」などの初期作品の段階に相当する。自分達のコミュニティや身の回りに近い内容から辿った小説が親しまれているのは、ドイツにしても同じことだ。

(引用はじめ)

「トーマス・マンの口から直接『自分は《ブデンブローク家の人々》だけしか書けなかったら、ドイツでは最も愛好される作家になっただろう』ということばを聞いた時、自分と同じようにこの長編を愛するドイツ人がたくさんいるのだなと、大いに共感した」

(「トーマス・マンとの邂逅」高橋健二 新潮世界文学 33 月報)

(引用おわり)

島崎藤村は、シーボルト来日から日清戦争までを背景とし東洋と西洋の文化比較を通して日本人そのものを描こうという構想の作品「東方の門」を太平洋戦争終結をもって書きはじめようと予定していた。しかしアメリカをよく知る藤村は日本の敗戦を予期し、1943 年から同作を前倒して連載を開始したが未完のうちに死去した。終戦の混乱と自身の死を予期し、読者の存在を半ば無視した上でないと着手できなかった。翻訳という手段があっても日本語という、世界の中での特殊の言語に縛られ、読者のレベルに合わせたものしか書くことが出来ず、もっと高度なテーマに挑む力量を持て余し、作家としての成長の機会を奪われているのではないかという苦悩が日本の作家の多くにあるのではないかと思う。

ギリシア・ローマの正統的継承とキャンオン(聖典)を基盤とする共通文化をもつ欧米では、ヨーロッパの各国各々の芸術観があり、文化的な競争が良い方向に時代を創っていった場合、その状況下で作家も様々なテーマの作品に挑戦し、より高度な内容のものを発表していくことも出来、自国で受け入れられなくとも隣国の国民性や感性にフィットする場合もあった。トーマス・マンにおいては自身のアメリカ亡命や大戦などの時代状況、マスメディアの発達などがそれを後押しする

結果となった。またトーマス・マン自身、自作の著作権や原稿料、(出版社の発行部数、印税計算などの間違いを細かく指摘。出版社からの 1200 マルクの固定給と別に出版ごとに印税を要求)ドイツ語から英語・フランス語などに翻訳される場合の内容管理(訳本を克明に調べ、ちょっとした会話の意味の取り違えを指摘したりするなど)や翻訳者の選定(英訳版「ブデنبローク家の人々」の英訳をしたロー・ポーター女史が続けて「魔の山」の英訳者に選任される運びになったが、トーマス・マンは「ブデنبローク家の人々」が叙情詩的にリアリスティックな色調をもつに反して、深い知的なものと象徴的な特質をもち、それまでの作品と本質的に異なる「魔の山」の翻訳者には全く別のパーソナリティが必要だとして反対した)に関してもエネルギーを使う。ハンザ同盟以来の自由自治都市リューベックの商家の伝統を継承したトーマス・マンのビジネスセンスと芸術家としての妥協無き姿勢が矛盾なく融合した。

「魔の山」以後はゲーテが「若きウェルテルの悩み」の中で、恋人役として描いたロッテのモデル、シャルロッテ・フォン・ブーフとゲーテが小説に扱われた出来事から 40 年後に再会する「ワイマルのロッテ」(1939 年 マン 64 歳)をはさみ、1926 年から 18 年間全四部にわたって書かれた「ヨーゼフとその兄弟」(1943 年 マン 68 歳)は「創世記」37 章から 50 章までのわずかな記述をもとにして描かれた大長編であり、旧約時代にまで遡って時代に制約されない人間倫理の根本を激しく問うた作品といわれる。

トーマス・マンの評伝や解説のいくつかを読むうちに、小説の完成度の高さにおいては「ブデنبローク家の人々」(1901 年 マン 26 歳)「トニオ・クレーガー」(1903 年 マン 28 歳)「魔の山」(1924 年 マン 49 歳)がまず挙げられるが、彼の文学上の最終結論としては晩年の一対の長編「ファウストゥス博士」(1947 年 マン 72 歳)と「選ばれし人」(1951 年 マン 76 歳)こそ、それであるという評価に行きついた。

「ファウストゥス博士」ではニーチェとシェーンベルクを合成したドイツの作曲家アードリアーン・レヴァキューンが悪魔と契約し、第一次大戦下から 1930 年に発狂し破滅するまでの過程が、レヴァキューンの親友ゼレーヌス・ツァイトブロームによって 1943 年 5 月から 1945 年 4 月までを時代背景として語られる。2 度のドイツの破滅を通して人間と芸術の絶望とは何かを徹底的に掘り下げている。「魔の山」ですら読者の精神を衰弱せしめるにはまだ生ぬるいと反省したトーマス・マンの黙示録的作品であり、控え目に言って読む拷問である。私はこれを全 47 章中の 40 章まで読み進めたところであるが、さらに 2 段組み 136 ページにわたる「『ファウストゥス博士』の成立 ある小説の小説」までも付属しており、もう泣きそうだ。

「選ばれし人」は肉親である兄妹のあいだの罪の子として生まれた主人公が、知らずして実母と結婚し、真相を自ら知った彼は二重の罪のあがないのため、身を海中の岩に縛りつけて苦行の 17 年間をおくり、その末に神に赦されローマ教皇になるという中世のグレゴリウス伝説をもとに描かれた。罪の汚辱の中から人間性の高貴へ到達すること、生まれながらに罪悪を背負っている完全な絶望の自覚こそが人間の偉大な徳であるという内容で、私はこれを読了したが、ここにドストエフスキーやトルストイにも共通する人類文学普遍の大命題を見たのである。

普通ならばトーマス・マンの小説人生はここで完了のはずであるが、遺作が「詐欺師フェーリクス・クルルの告白、回想録の第一部」(1954 年 マン 79 歳 同作は 1910 年から断続的に発表されていた。トーマス・マンは 1955 年 80 歳で死去)であるところに芸術家である自身のありようのなかに一種の詐欺師性をさえ見出したトーマス・マンの自己省察の徹底がある。

(おわり)

「ばかと間抜けを超越したもの」

第七章に登場するペーペルコルンのセテムブリーニからの人物評は、ばかの老人、内容空虚な形だけのものなど散々なものであった。だがその人物の前にセテムブリーニとナフタは霞んでしまうのであった。上手く言えないが、とにかくすごいということ、人を惹き付ける何かを持っていることはわかった。

だかそれ以上のこと、その人物が人を惹き付けているものがなんなのか、自殺に至った理由などはピンと来なかった。

そういったことを読書会で他の人の話を聞きながら知れていければと思った。

(おわり)

ウチら、トレンドハンター

(引用はじめ)

生活は多忙をきわめていた。ありとあらゆる種類の慰みごとが同時に行われていた。しかも、ときどきその中のひとつが気遣いじみた流行になって、みながそれに熱中した。たとえば写真がそうであるが、これは以前から「ベルクホーフ」の生活に重要な役割をはたしていた。

(引用おわり)

ほんの一時期、ブログをやっておりその日飲食店で食べたものを写真に撮って記事に載せていた自分を今では恥ずかしく思っております。むろん楽しみながらであったり、ブログで収入を得るんだと意欲的に活動されている方や、誰かのためにと使命感を持って「バエる」写真をスマートフォンで撮っている方を否定するわけではありませんが、上記引用個所を読んだ際、トーマス・マンが本書を書いた頃も、足早に過ぎ去ったアフターミレニアム、アフターコロナの現代も変わらないのだなと思いました。

「ベルクホーフ」の住人がその後も切手収集、チョコレートテイasting、幾何学図形のスケッチ、トランプなどに興じたように、現代の平和な美しい神の島国で生きる「ウチら」も娯楽・健康問題など様々なトレンドを、新聞だけでなくテレビやインターネットなどの媒体と結びついた広告主から賜り、とっかえひっかえ漁っているのだと改めて思いました。

テレビやスマホの画面を能面のように見入っている姿をセテムブリーニ先生が見たらばさぞかし激怒し、イエズス会士ナフタからすれば「へへ」と嘲笑されることでしょう。

私が子供の頃はいわゆる「心霊番組」なるものが昼間やゴールデンタイムに度々放送されたり、「心霊写真」の本がクラス内で回し読みされておりました。織田無道に亘保たか子氏など、あのオカルトブームは現平和家庭統一連合の活動を正当化するのにも一役買っていたのでしょうか？

私の幼少期にバブル崩壊、世の中がどんどん暗くなっていくばかりではなく、ジュリアナ東京ブームやら、某大学のスーパーフリーの皆様なんて珍獣の面々もありました。家電量販店の円高還元セール！で14インチテレビが10円、マクドナルドのハンバーガーが80円台、吉野家の牛丼もどんどん値下げ・・・などのデフレ社会。その頃から労働者の賃金をあげろ、となぜこの国の平地の人達は言ってこなかったのか。

そんなだらだらした空気の中で起きる数々の天災、オウム真理教によるテロ事件、凶悪な少年犯罪、秋葉原の連続殺傷事件、相模原の障害者施設の入所者に対する殺人、海を越えてアメリカでの銃乱射事件、人種問題による暴動などなど。

(引用はじめ)

「徹底した懐疑、道徳的な混沌の中からのみ、時代の要求する絶対的なもの、聖なるテロルが生れでるのです。」

(引用おわり)

謎多きペーペルコルン来訪→毒にも薬にもならない幾つもの慰み事(写真の現像でボヤ騒ぎが起きた話は笑いましたが)→オカルトブーム→療養所内で頻発する小競り合いや暴力事件。これらの話の流れも現代に重なると思う私もオカルト人間・陰謀論者でしょうか？

日本のペーペルコルンは誰になるでしょう？小泉ライオン丸元内閣総理大臣？自民党を、、、いや、やめておこう。完璧。

いくつもの小競り合いが展開されたあと、「魔の山」の世界はどうなっていったでしょうか？私は物語終盤のような世界は望みません。たとえ語り手が

(引用はじめ)

君の今後は決して明るくはない。君が巻き込まれた邪悪な舞踏は、まだ何年もその罪深い踊りを続けるだろう。

(引用おわり)

と言っている。

正直たくさんの箇所を読み飛ばしましたが、数少ない今年読了できた著書の中で一番感慨深い作品でした。以上 Addio

(おわり)

「魔の山」下巻P341～終わりまで感想文

後半も盛りだくさんな内容だったなと思いました。やっと読めたという感じともう終わってしまったという複雑な気持ちです。でも駆け足で読んだので全部を理解しているわけではないので、もう一度読み直したいなと思いました。

色々印象に残る場面も多くありますが、私はヘルミーネ・クレーフェルトの部屋で行われた、こっくりさんみたいな事が印象に残りました。

(引用はじめ)

部屋のなかの人数がこれまでよりも一人ふえていた。みんなからはなれて、部屋の奥に、事務機の長い一辺と屏風とのあいだに、さっき中休みのあいだエリーが坐っていた椅子、部屋のほうへむけられたドクトルの客用安楽椅子に、赤い薄明がほとんど真の闇にかわりかけ、目がほとんどなにも見わけられないあたりに、ヨーアヒムが坐っていた。(P.588)

(引用おわり)

ハンス・カストルプ以外の人たちもヨーアヒムの事を見たのなら本当に怖いし、見たような気分になったのかもしれないし、でも実際にもうこの世の人でない人に会ったところでどうする？いつまでも囚われていてはいけないと思って電気を付けたのかよく分からなかったです。

もしお話ができたところで、どうする事もできないけど、会いたい気持ちは分かる気もするなと思いました。

それだけまだヨーアヒムの事が気持ちのうえで整理できていなかったのかな？とも思いました。

私もヨーアヒムが居なくなってすごく淋しいなと思っていたので、登場してすこし嬉しい気持ちもあって印象に残りました。

他にも、もっと大切な所があると思いますが今回はあまり内容が理解できていない所が多いのでこんな感じです。

でも、長いお話でしたが今回読書会でみなさんと一緒に読む事ができて良かったなと思いました。

(おわり)

国破れて山河あり

やっと読み終えた。その瞬間ふと頭に浮かんだのは「国破れて山河あり」という杜甫の句である。

「人間の営みのむなしさ・はかなさに対比して、悠久なる自然の不変性や回帰性を肯定的に捉え、そこに心の慰めや魂の拠り所を見いだす」と解釈されるようだが、『魔の山』の中では、そこに「人間の縁」というキーワードがプラスされるように思う。

作品には、ハンス・カストルプを取り巻く人々とのさまざまな関係性があった。

例えば従兄弟(ヨーアヒム)や教育者(セテムブリーニ&ナフタ)、そして後半には同盟(ショーシャ夫人)や兄弟(ペーペルコルン)などと表現されていた。

ハンス・カストルプは彼らとの関わりから、多くのことを学ぶ。寛容性を持ちながら、自分自身の意見を明確にするという人間的な成長を遂げてきたように思う。

つまり、『縁』という関係性の中に人間は生きている。そして自然、空間、時間、精神を背景とした新たな冒険(挑戦)によって、その関係性は深まり真実を明確にすることができる。

そんなメッセージを感じた。

『魔の山』は「縁」と「悟り」の作品。西洋文学でありながら東洋的な気づきを与えてくれる作品といえないだろうか。

またここでいう「縁」は単に人と人との関係を示すだけのものではない。人生観や死生観、生や愛と死や魂、そして平和と戦争というように、人間と感情、人間と思想という関係もあらわしていると考ええる。

セテムブリーニとナフタの舌戦はその顕著な事例である。

ナフタの衝撃的な最期には大きな驚きを感じたが、ここではイデオロギーの「対立」は「戦い」につながるということを示すものであり、暗に当時の世界情勢をあらわしたものだと考ええる。

結局、ハンス・カストルプをはじめ青年たちは愛国心の名のもと戦場へ向かう。

(引用はじめ)

「世界の死の乱舞のなかからも、まわりの雨まじりの夕空を焦がしている陰惨なヒステリックな焰のなかからも、いつか愛が誕生するのだろうか」(新潮文庫 P649)

(引用おわり)

「国破れて山河あり」を類推させる一節である。

人間の営みによってなされる愚かな争いは自然の前ではいかに無力であるか。その意味で、自然こそは人間に愛と平和をもたらすキーワードであると感じた。

(おわり)

『魔の山 第七章』 読書感想文

「死に対して敬虔な気持ちを抱きつつも、生を謳歌する」。先の感想文でも述べたが、これは第六章の「雪」にて「太陽の子」の夢を通じてカストルプが得た着想である。

第七章では「生の謳歌」の体現者であるペーペルコルンと、美しくも死を内包する「菩提樹の歌」との交流を通じてその思想を深化させていく。

(引用はじめ)

「菩提樹の歌」の背後にある世界は、彼の良心の予感によれば、禁断の愛情の世界であったが、その世界はどういう世界であったろうか？ それは死の世界であった

(引用おわり)

結末部の戦場でカストルプは「菩提樹の歌」を口ずさむ。極限状態においてもこの歌が脳裏をよぎるのは彼の思想を最も表現しているからなのであろう。すなわち、「菩提樹の歌」という自らの思想と一致する芸術と出会うことでハンス・カストルプのビルディングスロマンは一応の完結を迎えたのである。

(引用はじめ)

生にいたる道は二つあって、その一つはふつうの真直ぐな大通りであり、もう一つは裏道、死を通りぬける道であって、これこそ天才的な道なんだ！

(引用おわり)

しかし、彼が裏道を通じて天才すなわちニーチェの言うところの超人に至ることはない。

そう、カストルプは無関心やオカルトブームといった流行に追随し、ルサンチマンに似た平凡さを見せるのだ。ラストで戦地に向かうのも他のドイツ青年と同じく新聞に触発され愛国心を看過させられたからに他ならない。そんな彼にはその他大勢の人々と同じく泥にまみれながら戦場で死にゆく運命が予告されているのだ。

(引用はじめ)

私たち人間は、だれも個人としての個人生活をいとなむだけでなく、意識するとしないとにかかわらず、その時代とその時代に生きる人々の生活をも生きるのである。

(引用おわり)

この物語は 20 世紀、すなわち大衆と熱狂の時代におけるビルディングスロマンの敗北を描いているのだろうか。

しかし見方を変えればそうとも言えない。

ドイツは第一次世界大戦の敗北で一度死を迎える。しかし人々の不断の努力により当時としては最先端な民主主義国家であるワイマール共和国として生まれ変わるのだ。これはハンス・カストルプの思想に通じるものであり彼は時代を先取りしすぎたのかもしれない。そう、この物語はドイツ国民に向けたマンからのエールだったのである。

(おわり)

時間者トーマス(完結編)

この感想文では、第七章で展開される時間論とその意図を整理した上で本書のモチーフを考察した。

▼第七章「海辺の散歩」における時間論の要点:

語り手はまず第七章「海辺の散歩」で多くのページを割いて時間論を展開する。※該当箇所は岩波文庫,P.341-P.353

- ①. 「時」それ自体を物語るのは基本、不可能。しかし、「物語」の要素に時が含まれている以上、時を物語ろうとする試みは不自然な行為ではない(詳細は⑥で説明)。
- ②. 音楽と物語は時間の要素が含まれており、そこで流れる「時間」は意味合いを持たせるといった共通点がある。しかし、音楽と物語の時間要素には相違もある(詳細は③および④で説明)。
- ③. 音楽は、現実的な時間に意味を持たせ高貴なものに高めるといった一つの要素しかない。
- ④. 一方で、物語には要素が二つあって、一つは物語の経過と再現に費やされる時間(=物語を語るのに要する現実的な時間であり音楽的な時間)、二つ目は物語自体の時間(=内容に即して長短が生じる非現実的な時間)である。
- ⑤. 前述④の通り、物語の持つ非現実的な時間という特徴はまるでアヘン中毒者の幻想のようである(※1)。
- ⑥. そのため、物語もアヘン中毒者と同様に「時」を扱うことができる。ということは、物語の要素である「時」は物語の対象になりうる。前述①と矛盾するが「時の小説」という名称にはそうした夢幻的な二重の意味を持つ。
- ⑦. 今、ハンスは自分が何歳なのか忘れており、彼は非現実的な時間の経験に<<不謹慎な快感>>を覚え、そのためこの状態から脱出しようとしなかった。彼は「混迷と混乱」の状態にある。
- ⑧. 前述⑦のハンスの経験と同様、時間と空間の区別の無い眩暈を覚える環境の一つに「海辺の散歩」があり、空間の単調さのなかでは時間は無くなり、一様な世界での運動は運動ですらなくなり、つまり時間が無い。

以上の①～⑦は、第六章以前の時間論とほぼ同様の主張である(『時間者トーマス』『続・時間者トーマス』参照)。

ただし、第七章に来てようやく語り手は時間論の意図を説明している。で、それは以下。

▼時間論の意図:

語り手は時間の伸縮という点に触れながら、<<幻惑的な要素・病的な要素を暗示したかったからである(P.342)>> および<<私たちが現にここに進行している物語で時を物語ろうとしていることを白状したかったからである(P.343)>> といったように、時間論の意図を述べており、さらに我々読者に対し、<<読者の誰もが私たちの主人公ハンス・カストルプの経験を一緒に経験することは、もちろん私たちの願うところ>> だとし、ハンス同様の経験(前述⑦で述べた「混迷と混乱」の状態)をさせようとしていることが分かる。ではどうして語り手はハンス&我々に上記を経験させたいのか。で、それは以下。

▼「混迷と混乱」を経験させたい理由:

語り手は、海辺の散歩で得た前述⑧の様な時間の認識について、それは <<余暇中の空想>> だがそれを空想として片付けるのではなく、<<人間の認識方法と認識形式を批判して、その妥当性を疑わしくすること>>、それは <<理性本来の使命>> だとし、また、<<理性の限界を批判して整理して>> それに基づいて生きるのが我々人間の義務であるという(P.352-P.353)。

▼本書のモチーフ:

といったことを考えながら、以上のことから本書のモチーフの一つとして考えられるのは「人間が絶対的な真理に到達することは無いがそれに近づけるよう批判・吟味を重ねるべし」、つまり「人間なら哲学せんかい！」ってことだと思う。

以上

※1・・・ちなみに、本書『魔の山』の原題は『Der Zauberberg(デア・ゾウババーク)』だが、英題だと『The Magic Mountain』と訳されている。これを日本語に直訳すると「魔法の山」「不思議な山」だが、アメリカ英語のスラングで「Magic」とは「合成ヘロイン」を意味する(ヘロインは超激ヤバのドラッグのこと)。語り手は、ベルクホークにおける非現実的な時間感覚をアヘン中毒に例えてることからして、本書を思いきって『合成ヘロインのような山』と訳しても大きく外れてない気がする。

(おわり)

トーマス・マン『魔の山 第7章』感想

(引用はじめ)

私たちは最後の章にはいるにあたって、ひとまず幕を下ろすことにしよう。しかし、幕がするするとおりているあいだに、私たちはこの上の世界にのこったハンス・カストルプと一緒に、遠い平地の湿っぽい墓地に思いを馳せ、その墓地でサーベルがきらめき、サーベルが伏せられ、号令の音がひびき、兵士ヨーアヒムの、木の根のからみあった墓の上で、ロマンチックな弔礼である三回の小銃斉射がひびきわたる音に耳をすますことにしよう。

(第6章のさいご 引用おわり)

こういった形式は美しくワクワクのようでその反面悲しく、戦争はずっとあるものという気持ちにさせられる。第5章「亡者の踊り」でカーレン・カールシュテットとヨーアヒム三人で訪れた墓地のシーンを思い返しました。トーマス・マンは幾つも童話のような可愛い場面や純粋なシーンを見せてくれた。

ハンスは親友を葬いに行かず引き続き山籠り。

『ベニスに死す』を読みました。どの辺が『魔の山』とつながっているのだろう？と思いつつ、面白かった。なんて言い表せばいいのだからこの感覚と作品のテーマは、『ブッデンブローク家の人々』もポチったりしているうちに風邪で水平生活してしまい、肝心のメインが読み終えられない。

月と太陽が同時に浮かぶホルシュタインの湖の上で、長い間お昼寝をしていた私は

ペーペルコルンがいきなり自死したような気がしたり

スピリチュアル的にヨーアヒムが登場したり、

あの口達者なナフタまでもがピストルでさよなら。

さらに、爪だちハンスが戦地に放り出され、さみしさにおそわれ、小舟の上でストレイシープ。

最後の章なのに目で追うだけになってしまった。これからまた読みたいです。第1章から読んでいて、自分はものの表面、片面しか見ていないということにも気付かされました。

今回風邪をひいて高田純次そっくりのベーレンスみたいなお医者さんを発見してしまいました。病気と苦悩によって少しは洗練されたかしら。

過去の浸潤と恋と天才的な愛と病気と放縦、そして「時」の美学…ドイツ語で読めたらどれほど素敵だろうと思いました。作中には出て来ませんでしたがバイエルン国王ルートヴィヒ2世という戦うことを嫌った王様もいたようです。今回の読書はドイツの歴史も知るきっかけになりました。そしてこの著者もまた苦悩を生きて作家してきた文学者のうちの一人なのだと思われるものがありました。

(おわり)

『魔の山』 第七章 感想文

『魔の山』下巻を読み終えた。

挫折しないで最後まで読むことができ、うれしい。

今回は第七章のあらすじを、上・中・下に分けて、それぞれ感想を述べてみたい。

上「マダム・ショーシャが山に戻ってくる。パーペルコルンという王者的『人物』を連れて。彼の『ねーげん的』な部分に、カストルプも強い魅力を感じる。ショーシャとの妄想的なこれまでの関係も徐々に更新され、変容を遂げながら、三人の時間が紡ぎ出される。」

ショーシャが帰ってきて、カストルプは複雑な気持ちになるが、かつてのような片思いではなく、大人の雰囲気の中で「王者」を交えてトランプしたり、三人新たな関係を現実的に築いていく姿が描かれる。大人の「青春」。「平地」ではただの「厄介」な青年かもしれないが、三人の複雑な関係のなかでそれでも前に進もうとするハンスの姿に、応援したく微笑ましい気持ちになった気がする。パーペルコルンという新しい人物を登場させることで物語に厚みが増しているのにも注目したい。パーペルコルンという「王者」が存在するだけで、セテムブリーニとナフタの論戦が自然としらけるところもリアリティあるなーと思った。

中「蓄音機設置によるカストルプの好きな音楽紹介、心霊術体験」

5番目に紹介されるシューベルトの『菩提樹の歌』は、物語の終わり、戦闘のさなかで、カストルプが口ずさむ歌である。親類、知人を多く失った寄る辺のないカストルプにとって、歌が「ふるさと」だと思うと、とても胸が締め付けられる。どんな歌なのか是非とも聴いてみたい。

心霊術体験。ひどくうさんくさい、というタイトルがつきながらも、これほど長く描写する必要があるだろうかと思直した。死んだはずのヨアヒムが気づいたら椅子に座っているところは面白かった。

下「ヒステリーによる喧嘩や暴動の蔓延、セテムブリーニとナフタの決闘、ハンス・カストルプ出兵」

かつて目の当たりにしたことのないような、異常な暴力行為を目の当たりにする。さらにそのような暴動事件に触れて、酔い、熱狂する知人が周りに出現したりする。カストルプはベルクホーフでの生活ですら、すっかり「信じられなく」なってしまった。この全体を覆う「精神状態」と、セテムブリーニとナフタの決闘は、もちろん無関係ではないだろう。ただただ、おそろしいと思った。

山を下りるカストルプとセテムブリーニとの最後の別れのやり取り、戦闘中の主人公を「引き」のカメラで撮影しているようなラスト。いつかまた『魔の山』を思い出すことがあったら、是非とも振り返りたい、良いシーンだなと思う。

結局、主人公はまったく「平凡」な青年であった。若さゆえに誘惑に左右され、さまざま事に翻弄された。それでも何とか若さだけが持てる「直感」を信じて時間を紡ぎ、前へ進もうとしたし、大きな時代の波に押し流されても、生きようとして紡いだ時間は事実として残り続けるのだろう。『魔の山』はそんな「ふつうの人々」のための物語だと私は思った。

とてもとても長く、難しい箇所も散見する小説だったが、混迷した現代に生きるわれわれにもどこか「ささる」ものがある。そのことに気がつく、ひどく唾然としてしまう、怖ろしい小説でもあると思った。

とにかくこれようやく『魔の山』を読み終えた。チャレンジできたこと、読書会にもお礼を申し上げたい。
さて、私も「平地」へもどる時が来たようだ。

(おわり)

『魔の山 第7章』感想文

マダム・ショーシャが愛人ペーペルコルンと連れ立って帰ってきた。

彼はオランダ出身のコーヒー王で、植民地ジャバのコーヒー園で儲けたお金持ちだが、上流階級では遣らない仕立てのスボンや労働者めいたシャツで身を包み、人を寄せ付けない風ではないものの、すでに年老いていて、アルコール性の慢性衰弱とマラリア熱を患っている。

相反するふたつの面が彼の中ではひとつになって、より大きな、超越的な何かになる『人物』として描かれていて、セテムブリーニとナフタが巻き起こす論理的混乱を吹き飛ばせるほどのスケールを醸している。

『魔の山』の住人たちが仰ぎ見るキリマンジャロ、ラスポスの登場であった。

(引用はじめ)

『スケールを持つ男性のために、どんな屈辱をも忍ぼうとしなかったら、それは女とはいえないでしょう』(下巻 P.443)

(引用おわり)

ここ、笑うとこだと私は感じて、おばさん構文とは言わないが、絵文字イラスト盛り盛りな字面に見えてしまい、ちょっと面白かった。

年老いたお金持ちの愛人に向けられる視線、つまり、ヴェザールの情欲、ベルクホーフの女性たちからの嫌悪、『男を拾ってきた』と口悪く言うペーレンスの皮肉、セテムブリーニとナフタからの邪魔者扱いを、シャーシャは『屈辱』と言っているのだろう。

それでもショーシャはペーペルコルンを見捨てはしないが、『彼がなにかおそろしい最期をとげそう』な予兆を感じて不安になる気持ちを、ハンスにも少し分け持たせて、口づけする。(P.444)

放縦な感情に従う仔猫の面目躍如だが、多くの男性が死に向かってゆく不穏な時代の空気がショーシャの不安からも伝わってくる。

ハンスは、ペーペルコルンとは違う感情、死の感情を愛するようになり、また、セテムブリーニが期待したものでもなかっただろうけれど、魂を高揚させる精神世界に没入する未来を選んで、銃弾の中を走りながら、陶酔して歌っていたのだろうと思う。

時代遅れといわれようとも、踏み越えてはならない理性の限界ラインがあるってことを見せつけるかのような、ナフタには死んでもらうぜ！ の決着なのだと思った。

人の心の真実は、撃たれるよりも撃つ方が強い恐怖を感じることを、ナフタは最期に漸く肯定した。(P.631)

トーマス・マンは、『真実とまやかしとを区分し認識する人間の権利は放棄できない創造的権利』とセテムブリーニに語らせていて(P.564)、区分し認識するのは、とても難しいけれども、私の胸に残った一節である。

誰そがれ時の薄暗がり、セテムブリーニが部屋の明かりをつけてくれた頃が懐かしい。

(おわり)

『魔の山』(下)第七章 トーマス・マン 感想文

2023年5月11日、午前0時40分、あの「魔の山」を読み終えた。この気持ちを何と表現したら良いか、胸がいっぱいで。

ラストの主人公の姿と共にごちゃまぜで涙してしまった。

ハンス・カトルプの教育者である二人、セテムブリーニとナフタの論争に読み手が辟易していた頃、最後の章に登場したショーシャの新たな旅の同伴者、「ペーペルコルン」が登場し人物として際立っていた。

「この世へ論理的混乱をもたらすような人物ではなかった」(P.354) と。

「さらに一人」という読者のその「辟易」を気遣うように彼を出現させた作者がとてもユニークだった。

ずっとショーシャ夫人に恋情を持ち続けていたハンス・カトルプにとっては、霹靂の光を浴びた思いで打ちのめされた。

やがてペーペルコルンが病に伏してしまい、そこに毎日見舞いに詰める程に彼に引き込まれていくハンス・カトルプ。ショーシャへの思いまで告白させられた。そして兄弟の誓い、彼のつぐないとは何だったのか。

ショーシャはペーペルコルンを愛していた。しかし、彼の闇の深さ、不安の大きさを一人では抱えきれずに、このベルク・ホーフへ戻ってきたのだ。

彼の恋敵であるハンスが彼を支える兄弟の誓いを交わすまでとなっていく様子が何とも不可解ではある。ショーシャ夫人の人となりには全く興味を示していないハンスは、つまり容姿や肉の誘惑に駆られていただけなのであろう。あっさり病の彼を受け入れた。成し遂げようとしないうハンスではあるが彼の周りには確実にいつも人が集まるのだ。

両親の死、祖父の死、死を身近に親近感さえ抱いていたハンスに、さらにペーペルコルンの自殺、対立していたセテムブリーニとの決闘でナフタがピストルで自殺してしまうという悲劇が襲った。

攻撃的に論争するナフタが抱えていた闇も、有り余る豊かな感情で生きていたペーペルコルンの不安も、「病」の壁を乗り越える見込みが消えて枯れていく自分を見る勇気がなかったのだろうか。戦争の勃発を敏感に感じたからか。

死後ショーシャの「棄権した」の一言が的を射ていた。ペーペルコルンを衷心から支えようと思ったショーシャの人を見るめの鋭さと賢さが光っていた。病気のために自由を得たショーシャ。彼女も「死」をみつめていたのではないか。

「晴天の霹靂」、「その時天地がとどろきわたった—」(P.637)

戦争が始った瞬間、読んでいても鋭いものが胸を貫いて来た。

戦争の始まりに人々の無意識的な動物的勤が働いてこのヒステリーを起こして行ったような気がした。

彼の自殺後ショーシャが去り、ハンスが抱えた「無感覚の悪魔」。

皆が転げるように悪い方へ引っ張られていく感覚が伝わってきた。

「ひどくさんなこと」、ドクトル・クロコフスキーでさえも霊媒師のような実験を繰り返した。
そしてハンスは、亡くなったヨーアヒムを呼び出すように頼んだ。

「チーム—— セン ——!」ヨーアヒムをうっすら捉えたシュテール夫人の声に、私まで不覚にも涙が出てしまったのだ。

悪魔は人を簡単に騙せる、全ては悪魔の所業なのに。

読み終えて、ハンス・カルトルプの七年間のベルク・ホーフでのシーンが身近に空間として立体的に思い浮かんで来た。

それぞれの場面が思い出せるのだ。やはりこの小説には力があるからだと感じた。とても細かくてしっかりとした文章が素晴らしかった。

ハンスは、この初めも終わりもないようなサナトリウムに結局七年間もいたのだ。毎日が死と隣り合わせの単調な連続。レントゲンで生まれて初めて自分もいつか死ぬ日があることを理解し、ベルク・ホーフの自然の中で、「春の奇蹟」を見て「陣取り」をし精神世界へ入り込んだ。

ワルプルギスの夜に、理性を失うほどの愛を告白し、そして破れ、無気力、空虚、無感覚を経験した。

そして二人の論者(教育者)に挟まれ、覚醒したり反抗したり。「人生の厄介息子」。

どんな環境に置かれてもハンスの誠実さは保たれていた。

それら消化された体験、教えが生きる自由を得た時、戦争になるなんて悲しすぎた。

(引用はじめ)

「愛は死に対立し、理性ではなくて、愛のみが死よりも強いのだ。愛のみが、理性ではなくて愛のみが、正しい考えをあたえるのだ。形式も愛と善意とからのみ生まれるのである」

「人間は善意と愛とを失わないために考えを死に従属させないようにしなければならない」(下巻 P.263)

(引用おわり)

遭難しかけた時に見出した言葉を、今戦争に向かおうとしているハンスに思い出してほしい、心に残る言葉だった。

終始ハンスを語り続けた「私たち」とは、もしかしたら亡くなった両親ではなかったかとふと頭をよぎった、

「魔の山」、諦めずに読み切って本当に良かった、この体験はとても貴重なものとなりました。

(おわり)

『人物』であること

ペーペルコルンは、植民地で一代で財を成した実業家だったのだろう。オスのライオンのような精力的なプレゼンスで、周囲に支配者的な空気を醸し出す「人物」である。

セテムブリーニは、ペーペルコルンを俳優のような大げさな身振りをする木偶の坊としてみていた。彼が愛する知性のようなものは、ペーペルコルンにはなかった。その代わり、情熱があった。そして、やっぱりモテるのである。

「人物」であるというのは、一体なんなのか、分析、説明するのは、難しい。

ハンスも、セテムブリーニも、ナフタも、ペーペルコルンに比べれば、小さな人物である。理性偏重で、高慢ちきで人情味が薄い。教育者然として、人に接して影響を与えたい傾向がある。私自身もそういう傾向が強いので、彼らのことはよくわかるし、彼らが必死に隠そうとしている弱点のこともよくわかる。つまり、人間として小さいのである。

人間として小さく、男性としての器量がない。そういうことは、マダム・ショーシャみたいな女性は一発で見抜くのである。

ヴェーザルに至っては、ノミのような器量である。自分の小さな器量が、ショーシャに見向きもされないことを苦にして、夜な夜な、彼女にビンタされたあげくに、唾をひっかけられる夢を見ると告白するほどである。(P.480)

ハンスと、マダム・ショーシャは、男女の関係があったのだろうか。私は、おそらく「二人の間には、なにもなかった」と思うのだが、ハンスが、一線を越えることがあったかのように振る舞い、ヴェーザルも、ハンスと彼女の間にそういうことがあったかのように信じて、ペーペルコルンもそうであったかのように信じるふりをして、同じ女性を愛したもの同士で義兄弟の契りを結ぶという、なんだか曖昧なままの煮え切らない展開であった。この意味が、いまだによく理解できない。

なんかハイティーンのカップルの噂をしているようで、自分に関係なければ、どうでもいい話なのだが、ハンスとショーシャの関係を勘ぐらざるをえない、このモヤモヤ感、ここを執拗に醸し出す表現を重ねる、トーマス・マンの、こういっては失礼だが、back number の『高嶺の花子さん』という曲を思い出させるような、彼自身のモテない感じが、なんとも切なかった。

しかし、これこそ小説家の業(ごう)であると思う。モテたら小説なんか書かない。『トニオ・クレーゲル』ではないが、ハンスとインゲの世界から疎外されているから、小説を書くのである。しかし、モテることより大切なことが世の中にある。ハンスが、魔の山を降りたのは、彼にとって命より大切なことに気づいたからだろう。

ペーペルコルンが自殺したあと、マダム・ショーシャはどこへ行ってしまったのか？ それに気がかかった。

彼らが、男女の関係だったら、その後も、マダム・ショーシャとの関係が何らかの形で続くということが描かれるはずだと思うのだが、義兄弟の契りを結び、マダム・ショーシャ自身とも、ペーペルコルンを守る同盟を結んだ以上、ショーシャがベルクホーフを去れば、それっきりであった。彼女はどこかのサナトリウムで死んだのだろう。

読者にも尻尾をつかませないという意味では、ハンスは、確かに食えない青年であった。そういう青年の最期を見届けるという読書体験によって、私も自分自分の、もう中盤に差し掛かった人生について、反省した。

結論としては、私は、せいぜい、セテムブリーニくらいの人物にしかなれない、ということである。

(おわり)